

ルカによる福音書12章1-7節 「偽善のパン種」

1A 警戒すべき偽善 1-3

1B パン種 1

2B 明らかにされる暗闇 2-3

2A 恐れるべき方 4-7

1B 死後の裁き 4-5

2B 忘れない神 6-7

本文

ルカによる福音書 12 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは、12 章に入ります、午後一節ずつ学びます。今朝は、初めの 1 節から 7 節に注目します。「1 そうしているうちに、数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった。イエスはまず弟子たちに話し始められた。「パリサイ人のパン種、すなわち偽善には気をつけなさい。2 おおわれているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずにくむものはありません。3 ですから、あなたがたが暗闇で言ったことが、みな明るみで聞かれ、奥の部屋で耳にささやいたことが、屋上で言い広められるのです。4 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。6 五羽の雀が、ニアサリオンで売られているではありませんか。そんな雀の一羽でも、神の御前で忘れられてはいません。7 それどころか、あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、多くの雀よりも価値があるのです。」

私たちは前回、11 章において、イエス様がパリサイ人の家に食事に招かれたところを見ました。そこで、イエス様が食事の前にきよめの洗いをなさらないのを見て、彼らは驚きました。そこでイエス様が、彼らが「外側はきよめるが、内側は汚れて一杯である」という、強い非難を口にされました。そして律法の専門家とも激しい言葉のやり取りがあって、その場をイエス様は立ち去りましたが、群衆の数がますますイエス様の周りに増えている状況です。その中で、イエス様は弟子たちに対して言葉をかけられました。それが 1 節から 7 節、実は 12 節までなのですが、1 節から 12 節までの言葉になっています。そこでイエス様が語られた言葉は、「警告」でした。「**パリサイ人のパン種、すなわち偽善には気をつけなさい。**」であります。人々が増えてきたからこそ、起こって来る問題があります。それが、「偽善」であるということです。

私たちは、まさか、この人が？と衝撃を受けるようなニュースが入ります。品行方正だと知られて

いた有名人が、実はとんでもない過ちを犯していた、ということがありますね。キリスト教の世界でも同じです。人々が多く注目し、集まって来るところには、人の心の動きの中で何か福音とは違う、福音とは異質なものが混入してしまいます。それは、私たちが有名にならずとも、誰もが持っている問題であり、課題です。

1A 警戒すべき偽善 1-3

1B パン種 1

もう一度、1 節を読みます。「**そうしているうちに、数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった。イエスはまず弟子たちに話し始められた。「パリサイ人のパン種、すなわち偽善には気をつけなさい。」**

群衆の数はますます増えています。このように人々が集まっています。イエス様のところに、人々が多く集まっているのですから、表面的にはすごい！ということになるでしょう。「神さまが働かれています！」と思ってしまうかもしれません。けれども、イエス様はそういった群衆には目を留めないで、ご自身いつも一緒にいる弟子たちに話しかけられたのです。そして警告されたのです。「**パリサイ人のパン種、すなわち偽善には気をつけなさい。**」です。

人々が集まるということには、「流行」というものがありますね。何かニュースに出てくると、人々の関心がそこに引き寄せられて、ではそのニュースがどれだけ重要なのか？という大した中身はありません。むしろ、そうしたニュースが広がったことによって、真実がむしろ隠されて、そこにいる当事者たちがむしろ迷惑を被る、酷い時は押しつぶされてしまうということさえあります。

キリストの教会の中にも、同じことが言えるでしょう。いや、教会の中だから気を付けなければいけないのです。ここでは、ユダヤ教という世界の中で起こっているのですから、むしろ世の中の流行というよりも、キリスト教会の中にある流行と言ってもいいでしょう。使徒たちの時代にもすでに、人々が引き寄せられていく教えの風があって、それにパウロは警鐘を鳴らしています。「エペ4:14-15 こうして、私たちはもはや子どもではなく、人の悪巧みや人を欺く悪賢い策略から出た、どんな教えの風にも、吹き回されたり、もてあそばされたりすることがなく、むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において、かしらであるキリストに向って成長するのです。」人々が集まると、どうしても一つの風のようなものが吹いてしまいます。それに振り回されることがないようにするためには、愛に根ざすこと、そして真理に根ざすことです、そうやってキリストに向って成長することです。

パリサイ人の教えとは何だったのか？「偽善」だということです。これは、先に話した、「11:39 外側はきよめるが、その内側は強欲と邪悪で満ちています。」と言われた言葉につながることです。「人に対しては清く見えるが、心を知っておられる神に対しては汚れで一杯である。」ということです。偽善、ὕποκρισις(ヒュポクリシス)というギリシア語は元々、劇における仮面を意味していました。

何かの役を演じる時に使われるもので、人に対して見せているものと、自分自身は全く違う姿を表しています。人には良く見せているが、神に対しては全く異なる場合です。そうなってくると、偽善というのが私たちの身に迫ってきますね。「自分を良く見せる」て、それと本当の自分は違う、ということとは往々にしてありますね。けれども、ここで気を付けたいのは、その「本当の自分」ということさえ、もしかしたら偽っているかもしれないのです。自分を欺くことさえ人はできます。神の見ておられる自分、といったほうが正確でしょう。

そして、それが「パン種」のように入って来るということです。パン種というのは、イースト菌のことです。イースト菌にしても、ヨーグルト菌でも、納豆菌でも同じことが言えますが、「わずかな量を入れるだけで全体に広がって行く」ということですね。我が家では、カスピ海ヨーグルトをいつも食べていますが、その種は年に三回か四回ぐらいです。旅行に行くと変えないといけないので、もし行かなかったとしたら、もっと少なくて大丈夫でしょう。使徒パウロはコリント人への手紙第一でパン種について話していて、全体の中に一部の罪が入っている姿として使っていました。罪が教会の中にあると、全体にその悪影響を広がります。例えば、婚外交渉なり、婚前交渉なり、不品行の罪を犯している男女がいたら、本人たちの問題では終わりません。対処しないのであれば、教会全体がおかしくなっていきます。コリントの教会では、まさにその問題が起こっていて、放置していたので全体に悪影響が及んだのです。「I コリ 5:6-7 あなたがたが誇っているのは、良くないことです。わずかなパン種が、こねた粉全体をふくらませることを、あなたがたは知らないのですか。新しいこねた粉のままでいられるように、古いパン種をすっかり取り除きなさい。あなたがたは種なしパンなのですから。私たちの過越の子羊キリストは、すでに屠られたのです。」

そして、ここでは偽善がパン種となって人々に広がっているということでもあります。人にはよく見えるけれども、内面は汚れているというパリサイ派のパン種が、群衆がどんどん押し寄せている中で、徐々に、少しずつ、広がっているということです。しばしば、世の中でも、「群衆の中の孤独」という言葉が使われますね。人が増えればそれだけ、つながりが出来て、交わりが深められると思いきや、むしろその中で自分が溶け込むことができず、孤独になるということです。それは、人が増えればそれだけ、人によく見せないといけないとする力が働き、それに流されると本来の自分とはかけ離れてしまうからです。

イエス様はパリサイ派だけでなく、律法の専門家にも激しく糾弾しておられました。「11:46 おまえたちもわざわざ。律法の専門家たち。人々には負いきれない荷物を負わせるが、自分は、その荷物に指一本触れようとはしない。」神に命じられていることに何か付け足しに戒めを与えて、神の戒めと同列、いやそれ以上にそういった人による決まり事を大事にしていくことです。異邦人の多くいるガラテヤ地方で、ユダヤ主義者が入り込んで来て、異邦人なのに割礼を受けさせたり、安息日や祭りを守らせようとしていました。そしてパウロは、烈火のごとく怒り、「1:9 もしだれかが、あなたがたが受けた福音に反する福音をあなたがたに宣べ伝えているなら、そのような者はのろ

われるべきです。」とまで言いました。なぜ人が、そのように律法によって義を完成させようとするのか？それをパウロがガラテヤ人への手紙の最後に、こう書いています。「6:12 肉において外見を良くしたい者たちが、ただ、キリストの十字架のゆえに自分たちが迫害されないようにと、あなたがたに割礼を強いています。」肉において外見を良くしたいという動機が働いていたのです。

福音によれば、私たちは真実な自由を手に入れることができます。誰が何と言おうと、どう思われようと、それでもキリストにある自分がここにいるということです。

2B 明らかにされる暗闇 2-3

次にイエス様は、真実は明らかにされることを語られます。偽善が広がっても、真実は必ず明らかにされます。

2 おおわれているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずすむものはありません。3 ですから、あなたがたが暗闇で言ったことが、みな明るみで聞かれ、奥の部屋で耳にささやいたことが、屋上で言い広められるのです。

偽善によって、いろいろなものを覆っています。けれども、イエス様は、これらは明らかにされると語られています。「奥の部屋」というのは、最も私的な空間のことを話しています。人に対してはひた隠しに隠し、けれども、自分だけ、また自分たちだけの、私的に話していること、行っていることが、終わりの日には必ず公にされて、光のうちに照らされるということです。

パウロは、福音というのは、こうした最も隠れたところにあるものを明らかにする神の裁きが含まれていることを話しています。「ローマ 2:16 私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって、人々の隠された事柄をさばかれるその日に行われるのです。」その他、隠れたことを明らかにされる神の姿は、いろいろなところに書かれています。「ヘブ 4:13 神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きするのです。」福音は、徹頭徹尾、私たちの隠れた事柄にしたがって神が裁かれるというところに基づいています。私たちがたとえ、誰にも知られていないことであっても、自分の思いの中にだけ留まっているものであったとしても、そのことにしたがって、光の中に明るみに出されるというのが神のなされることです。ですから、イエス様が来られた時も、外側の汚れではなく、内側の汚れを清めなさいと宣べ伝えられたのです。それは、外側の汚れがどうでもよいということではありません。内側がきよめられれば、外側も清められるということです。

2A 恐れるべき方 4-7

そして、イエス様は偽善の種が私たちに蒔かれてしまう、最大の理由を次に述べられています。

1B 死後の裁き 4-5

4 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。

「人への恐れ」、これが私たちにとって最大の敵の一つと言ってよいでしょう。人を恐れるので、人によく見られようとします。人から認められようとして、内側ではなく外側を清めようとします。「箴 29:25 人を恐れると罾にかかる。しかし、主に信頼する者は高い所にかくまわれる。」この言葉は、私たちが心に留めて、諳んじるぐらいにするとよいですね。人を恐れるのではなく、主に信頼するのです。そのことによって、私たちの心も思いも高い所に匿われるようにして、守られます。

恐れることによって、私たちの心に愛と信仰が芽生えません。使徒ヨハネは、愛には恐れはないと明言しています。「Iヨハ 4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。」恐れは、そのまま信頼や信用を持たせない力となります。人が願っているもの、要求してくるものは、大抵の場合、神の願われていること、求めておられることと真逆です。人の思いと神の思いは異なり、その道も異なることがイザヤ書に書いてあります。ですから、人を恐れると、神が何を言われても神に近づくことを恐れ、その言われていることに従わないようにさせます。「10:38-39 わたしの義人は信仰によって生きる。もし恐れ退くなら、わたしの心は彼を喜ばない。しかし私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。」

イエス様は、今、この地上で生きている時に受けなければいけない苦しみや迫害について話しています。ここにおいて迫害は受けるかもしれないが、しかし、神は死後の世界、その永遠の世界においても支配者なのだということです。人は、自分のからだを殺したとしても、死んだ後は指一本触れることはできません。しかし、神は、死後にゲヘナに投げ込む権威を持っておられます。人を恐れて、神を捨てるようなことがあれば、神はゲヘナに投げ込む権威を持っておられるのですよ、とイエス様は警告しています。神を畏れます。

しかし主は、「わたしの友であるあなたがたに言います。」と言われていました。イエス様は、弟子たちを友としてみなし、語っておられます。神は、私たち人を愛し、慈しんでおられます。ですから、キリストをこの世に遣わされ、私たちが神のいのちにあずかるようにしておられます。罪を赦し、キリストの甦りによって私たちもこの方にあって命を持つようにしてくださいました。しかし、その愛を拒むのであれば、神は強いられるようにして、悪魔と悪霊どものために用意されたゲヘナに明け渡さなければいけません。人が地獄に行く時は、自分自身が神の最善を信用せず、神を退けて、拒んでいるからです。神は、その人の自由意志に反してまで、天の御国に入れることはできない

からです。「ローマ 2:4-5 それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。あなたは、頑なで悔い改める心がないために、神の正しいさばきが現れる御怒りの日の怒りを、自分のために蓄えています。」

2B 忘れない神 6-7

そして、イエス様を信頼している者たちには、地上でどんなことが起こっても、神を信頼してください、恐れないうでいなさいと励ましておられます。

6 五羽の雀が、ニアサリオンで売られているではありませんか。そんな雀の一羽でも、神の御前で忘れられてはいません。7 それどころか、あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、多くの雀よりも価値があるのです。

これが真実な生き方です。人を恐れて、人によく見られようとして生きていくこと。そこに偽善があって、真実に神に近づこうとしないこと。その先は神の裁きなのですが、しかし、神を信じて、キリストの御名を信じて、神に近づいた者には、どんな小さき者のように見えても、そこに必ず尊厳を与えてくださいます。五羽の雀がニアサリオンで売られているとあります。今の価格で言えば1000円程度の値段でしょう。最も安価で買える肉です。その雀の一羽、すなわち200円程度しかない価値のものを、神は天から落とさずに、飛び回ることができるようにされています。ましてや、神のかたちとして造られた人に対して、そしてご自分の御子を愛して、従っている者たちに、善くして下さらない訳がないのです。ここに、「あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています。」と言われていています。私は、ちょっと気になる御言葉がですが(?)、ここで分かるのは私たちが自分の事を気にしている以上に、はるかに気にしてくださっているということです。

私たちが自由に生きるとは、犠牲が伴います。福音の中に生きるとは、時に友を失う、親しい家族関係を失う、職を失う、そして信教の自由がないところでは命さえ失うことがあります。けれども、その中にあっても主は私たちを覚えておられるのです。独りになる、孤独になることはありません。そして、教会は、そうした福音の自由を手に入れた者たちが集まる場所です。ここで、偽善が入れば交わりを汚します。聖書には、「ローマ 12:9 愛には偽りがあるてはなりません。悪を憎み、善から離れないようにしなさい。」とあります。主が覚えておられるのだから、真理になって自由に生きると思っている者たちが集まる時に、主がそこにおられて、私たちに励ましてくださいます。そして互いに励ましの中に主がおられます。「ヘブ 10:23-25 約束して下さった方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白し続けようではありませんか。また、愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか。ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合いましょ。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。」